

鼎談「生き方」 ～自己を見つめる道德科指導～

元玉川大学客員教授 後藤 忠
東京都教職員研修センター教授 朝倉 諭美子
聖徳大学教授 染谷 由之

染谷 12月に東京都教育委員会指導部と都小道研合同の道德講演会がありました。東京都教育委員会の先生からは「道德科はいい意味でも悪い意味でも落ち着いてきました」という話がありました。いい意味では、各学校で評価について話題となり、研修会が行われるようになり、全体計画の別葉や年間計画の整備が進んできました。悪い意味では、道德科授業がパターン化されていませんかという話がありましたが、どのようなお考えがありますか。

朝倉 東京教師道場では、教職5年目から10年目の先生方が教科書をうまく活用しながら授業研究を進めています。一方で、各学校の授業では、教科書「で」ではなく、教科書「を」教えるというものを拝見することがあります。「教科書があるのにどうして研究をしないといけないのか」という先生方もいるのが現状における課題だと思います。

後藤 道德が「特別の教科 道德」になった途端、学校は一斉に浮き足立ったというのが私の印象です。「これからは道德の評価をしなければならない、そのためには授業をしなければならない」という何んとも奇妙な問題意識です。

移行措置が始まった時期から、「道德授業についてよく分からない、イロハのイから

教えてほしい。」という学校の依頼を私は優先して受けるようにしてきました。

そういう学校では、校長先生が自ら研修の先頭に立ち、教員と机を並べて熱心に研修を受けられる、一緒になって議論される、そういう校長の姿を間近に見て、本気にならない教員はいないと思いました。校長の姿勢が学校の道德教育充実の鍵をにぎると思います。

最近では、確かに道德熱は落ち着いてきたと感じます。実はその熱は道德教育熱ではなく、単なる道德評価熱だったという何とも情けない話です。

道德教育は人間形成の根幹にかかわる学校教育の中心柱であるべきものなのに、そんな程度で終わらせてよいのかと思うところです。

染谷 道德熱をもち、もっと力を入れていかないといけないにもかかわらず、教科書を使えばいいではないかというところがあるということですね。今後さらに道德科授業の色々な実践を積み重ねていく必要がありますが、教科書や指導書についてどのようなお考えがありますか。

後藤 教科書の質は、二回目の方が一回目より確かに良くなったと思います。しかし、まだ「こんな教材で道德授業ができるのか」と思う教材はありますが、そうした教材

は今後精査されていくことと思います。

問題は、各教材の終わりのところにある「学習の手引」とか「考えましょう」などに書いてある学習課題、あれは NG の連発です。また、高価な教師用指導書の展開例に間違った例がたくさん載っている。そんなものを鵜呑みにして授業をしても指導力は付かないし、児童の道徳性は育ちません。

教師は、正確で持続可能な最小限度の基礎基本を習得し、それを基に道徳の指導案は自分で考えて授業を行うべきです。

朝倉 各社とも教科書や指導書がとても丁寧で親切になっています。そのため、その指示に頼りがちになり、その指示以外の指導は邪道だという意識になってしまいがちです。先生が学級の子供たちの実態に応じて展開するのが授業ですが、そこが課題の先生が多いのではないかと思います。

染谷 これからはデジタル教科書がメインになる時代がくるのかもしれませんが、教科書をどう使っていくのか、児童をしっかり見ながら実態に合わせて活用していくことが大切なのだと思います。

さて、テーマは「生き方」～自己を見つめる道徳科指導～ということですが、生き方について考えさせていくには、どんなことに配慮していく必要があるのでしょうか。

朝倉 私自身のことから考えても、教材から感じ取るものが多いです。忘れられない教材がたくさんありましたし、教材に出てくる主人公の生き方には人間としてどうあるべきか一本柱になるような示唆があります。そこに感銘を受けながら教材と触れ合うことによって、こんなことを目指したいという目標になったり、これは自分にできそうにないなと批判的に思ったりしながら

ら、自分自身の生き方を見つめることを大事にしたいものです。

後藤 道徳科の学習は、児童が自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める学習です。その学習に、なぜ教科書などの教材を使うのでしょうか？

それは、日常生活の生の出来事を教材にすると、そこには利害・損得・打算などが働いて、純粹に自己を見つめることが難しくなるからです。

だから教材は大事なのです。その教材は児童の心を映す鮮明な鏡でなければならないし、児童の生き方の糧となるものでなくてはなりません。

染谷 生き方を考えることや自己を見つめるためには、教材が欠かせないというお話でした。生活場面や体験を道徳科の時間に扱う際はどのような点に配慮したらいいのでしょうか。

朝倉 自己の生き方についての考えを深める上で一番重要なことは、子供が「自己実現を図る主体者としての自分について考える」という意識をもつことです。つまり、自分自身をよりよく高める方向に子供自身が自分を導いていくことです。指導者はそこまで意図しながら日常の学級経営にあたり、道徳科の指導をすることが必要だと思います。子供が学習の主体者としての自分を念頭に置いて学びを蓄積し、自分自身の成長を図るという姿勢を身に付けさせたいものです。道徳性は内面のものですから、内面を見つめることは自分にしかできません。一時間一時間の学びを繰り返す中で自分を見つめ、叱咤激励する姿勢を身に付けることが必要なのではないかと思います。

染谷 自己実現の話が出てきていますが、子供たちに自分の生き方について考えさせる中で、これから先の生き方について考えさせるために、こんなことに気をつけたいということはありませんか。

後藤 「自分のこととして考える、自分事として考える」という意味を誤解している人が多くいます。「自分事として考える」を安易に「もし自分だったらと考える」と解釈してしまうと、教材を使って学習する道徳授業の意味、特質がいつべんに壊れてしまいます。何のために教材を使うのかをもう一度よく考えなくてははいけません。

児童は先生に言われなくても無意識のうちに「自分だったら」と考えています。それなのに、先生から「もし自分が手品師だったら…」などと問われると、一瞬で利害損得が渦巻く現実を引き戻されてしまいます。そうした危険を考えていない無神経な指導例が多く見られます。

児童が、「今までの自分はどうか、今の自分はどうか、これからはどうか」と自然に自分の生き方について考える、そういう学習条件や学習環境を整えるのが教師の役割であり、指導の工夫というものです。

朝倉 現状を認識するには視点を明確にすることが大切です。その視点が具体的にイメージ化されれば、自分はどうかと考えることができます。その視点において現状を認識し、友達と交流しながら再検討を加え、最終的に納得解を得る。そこまでの一連の思考過程を考えて指導を工夫することが必要なのではないかと考えます。

染谷 教材に接していく中で、子供たちが教師に自分のこととして考えるように言われなくても、自分なりにどうなのかなと

自然に考えられるような道徳の授業をすることで、教材の良さが生き、自分自身をしっかりと見つめることができるのではないかというお話をいただきました。その通りだと思いました。

都小道の会員の先生方から質問がきているので、お答えいただければと思います。まずは「教材提示の工夫」について、この教材提示は見事だったという印象に残る授業があれば教えていただきたいです。

後藤 あるテレビ番組で村田吉弘さんが「日本料理のだしは昆布と鰹節の組み合わせで、1+1=8にもなる」という話をしました。道徳授業で、その昆布と鰹節にあたるものは何か？ 私は三つあると思います。一つは教材、これは一番大事な道徳の素です。次は教材提示、どんなによい教材であっても児童の心への届け方がずさんだと、せっかくの教材は台無しになります。もう一つは発問、発問は児童に考えるポイントやきっかけを与えるものです。

その教材提示ですが、星野富弘さんを題材にした「字が書きたい」の教材提示で、松井敏校長先生は声のトーンをグッと抑え、静かに、しみわたるように、切々とした読み聞かせで、とても心に響きました。

また、草刈沙原先生の「泣いた赤おに」は臨場感たっぷり、赤鬼と一緒に泣いて教材提示をして、大変感動的でした。要するに、教材の性質や持ち味に合った教材提示をしようということです。

どんな教材提示であっても、共通して大切なことは「間」です。その「間」の中で児童は、自分の体験をもとに言語情報、文字情報を映像に変えるのです。児童の確かな教材理解を図り、深める上で「間」は非常に大切です。

朝倉 ICT を使って画面を提示しながら範読するなど色々工夫した教材提示があり、今後の発展が楽しみです。範読として疑問が湧く水準のものもあります。言葉は重要で、教材を語るということが教材提示には必要だと思います。臨場感たっぷり語るのもいいし、静かに切々と語るのもいいです。その先生らしい工夫した範読が最低限必要だと思います。

草刈沙原先生は「泣いた赤おに」を山形県の語り部の方から学んで教材提示をしていました。また、中学校の戸上琢也先生は演劇部で鍛えた語りを生かしていました。子供はしんと聞き入り、教材の内容理解ができて、いきなり核心をつく発問をしても大丈夫でした。子供の実態に合わせて、自分の持ち味を生かして行うことが大切だと思います。

後藤 よい教材を選んだというだけで道徳授業は 50% 成功です。そして完璧な教材提示ができてプラス 30%、計 80 パーセントの授業になります。そのあとは、「どうだった？」と児童に問いかける、初任者でも十分できる授業です。他の 20%、つまり話し合いなどをどう深めるかについては、教師のキャリアによって違いが出ますので、初任者はまず 80% をしっかりやればよいと思います。

染谷 「教材提示に命をかける」ということでやってきたことがありました。そういう授業が子供たちの心に残っていて、3 月に聞いてみると先生が心を込めて伝えたものが子供たちの心に響いているということがよくあると思います。先生によっては音楽が得意で音楽をうまく使っている人、ブラックシアターを使っている人と様々な方法がありますが、先生が得意とするものを

使って子供たちにぜひ素晴らしい教材提示をしてほしいと思います。

もう一つ会員から質問があります。「最近心情ではなく、態度や判断力をねらいとする授業が多くなってきているけれども、態度や判断力を育てるときにどんなことに気を付けたらいいか」という質問がきていますが、どうでしょうか。

朝倉 心情が判断力の根拠になる場合が多くあります。可哀そうだからやめようとか、気の毒だから助けようというように判断の根拠になるわけです。道徳的価値観は言動の理由や根拠に表れることが多いですから、問い返しなどをうまく使って発言の根拠を引き出し、表面的な行動のレベルでの話し合いではなく、一段階掘り下げた価値観のレベルにおける話し合いを深めていければいいのではないかと思います。

後藤 基本的には全く同感です。昭和 55 年頃だったと思いますが、研修部で道徳的な判断力を育てるための研究を 2 年間ほどしたことがありました。「道徳授業はいつも気持ちを育てる、心情を育てるばかりだ、それ以外の指導過程はないのか」という問題意識のもとにオープンエンドの教材を使ったり、価値葛藤を組み込んだりして実証的に授業で取り組みましたが、これという明確な決め手はつかめませんでした。

その研究で分かったことは、道徳的心情が豊かでないと何も始まらないということです。

ところが、道徳科になってから「〇〇しようとする態度を育てる」というねらいがやたらと目に付くようになりました。

そもそも道徳的態度とは何か、それは豊かな道徳的心情と確かな道徳的判断力に裏打ちされた道徳的行為への身構えのことで

す。身構えですから、心情や判断力が相当充溢していないと道徳的態度など身に付くわけがない、にもかかわらず小学校 1 年生の授業から「態度を育てる」というねらいの指導案を多く目にします。

それは道徳の授業を通して、児童の欠点や態度を改めさせようとする授業者の邪心、下心の表れではないのか、道徳授業は児童の欠点を是正し、短所を改めさせるために行うものではない。こういう指導観で道徳の授業をやられては、児童が気の毒です。

授業者は指導観を明確にし、この時間で何を豊かにするかをはっきりイメージして授業に臨むことが必要です。

染谷 最後になりますが道徳の授業を大事にしている先生方にぜひこんなことを大切にしてほしいということをお話していただきたいと思います。

朝倉 コロナ禍に翻弄されている現状もあります。今の日常を子供たちがどんな思いで生活をしているのかを深いところで理解してほしいです。自殺する青少年が増えています。誰にも頼らず結論を出してしまう自己完結型の子供が多いと聞きました。一見何の問題もなさそうな子供も深い悩み

を秘めていることがあります。そのことを理解し、日常の触れ合いを大事にしながら、どの子も心を開いて話し合える道徳授業を目指して道徳教育を進めてほしいと思います。

後藤 教育の結論は教師です。元気でエネルギーに満ちた先生に担任されている子供は幸せです。自信などなくてもいいから誇りをもって、自分で考え、新しいものに挑戦し、たとえ失敗してもそこから学ぶという姿勢で仕事をする、そういう生きる力を道徳教育界から広げて行ってほしいと期待します。

染谷 子供たちに寄り添ってほしい、子供たち一人一人に笑顔を与えてほしいと思います。そのためにも子供たちと話したり、遊んだりして何に興味があるのかをしっかりと知って道徳の授業に向かうとちがうのではないかと思います。ぜひ子供に寄り添った道徳授業を行ってください。

以上

(文責:後藤忠)